

座席 番号				
受験 番号				

二〇二二年度 二月一日 入学試験 国語問題

国語の注意 答えはすべて解答用紙に書きなさい。

答えは解答らんからはみ出さないように書きなさい。

字数の指定がある場合は、句読点や記号なども一字に数えなさい。

【試験についての注意事項】

- 1 机の上に出してよいものは、次の三つです。それ以外のものはカバンにしまってください。
 - ① 座席番号シール と 受験票（机の左上におきます）
 - ② えんぴつ数本（シャープペンシルも可・色ペンやマーカー、定規の使用は不可）
 - ③ 消しゴム
 - 2 次のものを持ってきた場合は、カバンにしまってください。また、休けい時間中も使用してはいけません。
 - ① 腕時計・置き時計など（音が鳴らないようにしてください）
 - ② 携帯電話・スマートフォン（電源を切ってください）
 - ③ 腕時計型の情報端末（Apple Watch など）
- ※ 許可なく携帯電話・スマートフォンや腕時計型の情報端末を使用した場合、不正行為とみなすことがあります。
- 3 机の中には、何も入れないでください。
 - 4 チャイムが鳴ったら、次のことを記入してから始めてください。
問題用紙 ↓ 座席番号 と 受験番号
解答用紙 ↓ 座席番号 と 受験番号 と 氏名
 - 5 問題についての質問は、いっさいできません。
 - 6 気分が悪くなったら、すぐに申し出てください。
 - 7 物を落としたら、自分でひろわず、手をあげてください。

次の文章は、森 絵都「風と雨」の一節です。これを読んで、後の問いに答えなさい。

風香と瑠雨は小学五年生のクラスメイト。友だちグループの分裂で一人になった風香は、無口でいつも一人でいる瑠雨といっしょに過ごすようになった。しゃべらないけれど人を拒まない瑠雨に風香はいやされるようになる。そして瑠雨が特別に良い耳を持っているのではないかと思うようになる。一方、瑠雨は……

「ドッジボールもヤバンでやだったけど、バスケットくらべたらまだマシかも。ドッジボールだと、ぶつかってくるのは人間じゃなくて、ボールだけだしね。一回ボールぶつけられたら、こわいのもそれでおしまいだし。やられたーとか、いちおう、くやしいふりしてたけど、わたし、ほんとはホッとしてたかも。ああ、これでもう逃げまわらなくてすむって。コートの外側は平和だもんね」

——コートの外側は平和だもんね。

風香ちゃんの言葉に、ドキッとした。

自分のことを言われた気がしたから。

わたしたちは体育館へ行くとき、連絡通路の窓からは中庭で遊ぶ鳥たちが見えたけど、わたしの頭のなかはもう「外側」のことについて、鳥たちのうたも入ってこなかった。

わたしはずっと外側で生きてきた。

口を閉じ、なにも言わないことで、いつもみんなの外側にいた。

でも、わたしがイメージする「内」と「外」のラインは、ドッジボールのコートとはちがう。

どっちかっていうと、大なわとびのなわだ。

なわの両はしをだれかとだれかがにぎって、大きくふりまわす。そのなわがえがく弧のなかに、まずはひとりが入って、ぴよんぴよんはねる。ふたり、三人、——なわをよけてとぶ足の数がふえていく。つぎはわたしの番。とぶとぶする。足がすくむ。タイミングが

つかめない。思いきってふみこもつとするたびに、むかってくるなわにしゃまされる。みんなは平気でとんでいるのに、どうしても、わたしだけそこに入っていけない。

話をしているみんなの輪にくわれないとき、わたしはいつもそんな気分になる。ひとりだけ、なわの外側にはみだしている感じ。

三つだったか、四つだったか、ものごころがついたときからそうだった。みんなとしゃべる。言葉をかわす。だれもがふつうにやっていることが、わたしにはできない。心のかではいろいろしゃべっているのに、どうしても口から出てこない。

なんで自分だけごうなんだろう？

小さいころはふしぎだったし、さびしかった。いつも自分だけおいてけぼりをくついている気がして。

でも、ひとつひとつ年をとるうちに、わたしはそんな自分になれていったんだと思う。そうしていったんなれてしまうと、なわの外側には、外側にしかない平和があった。風香ちゃんの言うとおりの。

むりして内側へ入りこもうとしなければ、なわに当たって痛い思いもしない。なわをふんずけて、みんなからせめられることもない。びくびくしながら他人の足に合わせなくても、自分のペースを守っていられる。

それに、なわの外側は、とても静かだ。

自分がしゃべらないぶん、ここにいて、いろんな音がよく聞こえる。

みんなの一語一句。笑い声。どなり声。あいづち。ささやき。ため息。したうち。すすり泣き。

しゃべらないぶん、わたしは熱心に耳をすました。みんなの音をひとつひとつひろいつめて、ひそかにおもしろがっていた。

人間の音だけじゃない。ひろえる音は無限にあった。

雨粒がしたたる音。

風のうなり。

木の葉のさざめき。

鳥のさえずり。

ねこの鳴き声。

飛行機の音。

窓がきしむ音。

だれかがいすを引きずる音。

世界があんまり多くの音に満ちているから、わたしはときどき、ひろうのに必死になりすぎる。人の話をきいていても空からふってくる音が気になってしまったり、授業中でもグラウンドのざわめきに気をとられてしまったり。

なわの外側で、わたしはわたしなりにいそがしい。

でも、もちろん、そんなことはだれにも話したことがないから、みんなはわたしを「しゃべらない上に人の話をきいているのかどうかもわからない子」だと思っている。

「溜雨ちゃん、またぼうつとしちゃって。きいてる？」

その日も、風香ちゃんにつっこまれた。

「溜雨ちゃんって、五分に一度はぼうつとしてるよね。ま、いいけどさ。うん、いいよ、いいよ、いまのうちにたんまりぼうつとしといてよ。ターちゃんがうたいたしたら、ぼうつとしたくてもできなくなるから」

くもり空の放課後、わたしはふだんは通らない桜並木の道を通って、風香ちゃんの家をめざしていた。

② ぼうつとしていたのは、足もとに気をとられていたせいだ。

でこぼこの土の上には赤や黄色の落ち葉がかさなりあっていて、わたしの足がそれをふむたび、かき、こそ、ときさやくような音を立てる。

「ほんとに、ほんとに、かくこしてね。ターちゃんのうた、マジひどいから。たぶん溜雨ちゃんが思ってる何百倍もへた。ううん、何千倍かもしれない。何億倍かもしれない」億に続く単位がわからなかったのか、そこで風香ちゃんはちよつとだまってから、「何十億倍かもしれない」とごまかした。

「とにかく、ほんとに、拷問かかってくらいひどいの。はじめての人にはかなりヘビーだと思っ」

これは本気なのかケンソンなのかわからないけど、風香ちゃんのおじいちゃんのうた洋曲に、わたしは本気できょうみがあつた。

ふつう、お年よりといえば演歌のイメージなのに、風香ちゃんのおじいちゃんは洋曲をうたうのだ。いったいどこの国のどんな曲なのか。おじいちゃんの声はどんな音なのか。かなりヘビーって、ヘビメタってこと？

まだ出会ったことがない新しい音に、わたしはいつもあこがれている。

それがレアものであるほど心をひかれてしまっ。

もちろん、さそってくれたのが風香ちゃんでなかったら、いくら気になっても、このこついてきたりはしなかったけど。

「ごめんね、わたし、しつこいかもしれないけど、マジでターちゃんの洋曲にはこまってるんだ。毎日毎日、朝から晩まで、なぞのかいぶつみたいなおたけびが、家じゅうに鳴りわたってるんだよ。おふる入ってても、おやつ食べてても、ネットしてても、テレビ観ても、ずーっとBGMがターちゃんの洋曲なの。しかも、新しい曲をおほえるたんび、ターちゃん、わたしとママを自分の部屋によびつけて、きいてもらいたがるんだよ」

④ いつもひとりしゃべりつつつけてくれる風香ちゃんの声は、自由な鳥みたいに軽やかに、明るい。ドレミファで言ったら、ぜったい「ラ」だ。青空の下や、緑の草原がにであう声。

小一のとときからいいなと思っていたこの声を、まえば遠くできいていただけだったけど、風香ちゃんたちの五人グループが「ニ」「ニ」「ニ」っていうふくぎつなこわれかたをして以来、きゆうに近くできくことがふえた。

「二」になれこのわたしは、むりをしてまでだれかと「二」になりたいとは思わないけど、風香ちゃんの声をきいているのは気もちいい。

「つっても、わたしたち、おじいちゃんにお世話になってる身だからさ、あんまりぶーぶーもんくも言えないんだけど」

風香ちゃんの声がふいに半音さがつた。あれれ？

「ぶっちゃけね、うちのママって、出もどりの。親の反対をおしきって結婚して、あんのじょう、六年前に離婚して。別れてすぐのころは、ママ、いまさら実家には帰れないと

か意地はってただけで、生活くるしくて、それも言ってもらえなくなっちゃってね。ターちゃんちにきてから、お金の心配しなくてよくなったし、ごはんのおかずもふえたし、そこんところは感謝してるんだ」

感謝とおとなびた口ぶりで風香ちゃんは言っている。風がシヤララと通りぬける音がその声にかぶった。

「けど、おかげでどんだけふえたって、あの洋曲だけはマジでかんべん。きくたびに寿命がちぢまってく感じ。ターちゃんにはいつこくも早く自分の才能のなさをみとめて、新しい趣味を見つけてほしいんだよね。囲碁とか、ぼんさいとか、静かなやつ。ってわけ……」

よろしくね瑠雨ちゃん、とまた声色を変えた風香ちゃんがわたしにむきなおった。

「ターちゃんに洋曲うたわせたあと、わたし、瑠雨ちゃんにきくから、『どう？ 才能あると思う？』って。そしたら、瑠雨ちゃんには残念そうに首をふってほしいの。うんと残念そうにね。心をオニにして、しつかりふってね。よろしく〜」

言いたいことを言いおえると、風香ちゃんはいざ出陣、とばかりにキツとまえを見すえ、ずんずんと落ち葉をけちらしていった。

おいていかれないようにそのせなかを追いながら、わたしはふたつのことを頭のなかで考えていた。

ひとつは、お世話になつてるおじいちゃんに、自分の口から「へたくそ」って言えない風香ちゃんは優しい子なんだな、ってこと（かわりに、わたしをオニにするのはどうかとと思うけど）。

もうひとつは、どこの家にも事情があるんだな、ってこと。

わたしの家も、事情ってほどでもないかもしれないけど、ふつうの家とはどこかちがう。お父さんはリハビリのお医者さんで、お母さんは看護師。おなじ病院にとめてあるふたりは、とにかく一年中いそがしくて、家にいられる時間はあんまりない。そのあんまりない時間をめいっぱい大事にするみたいに、ふたりとも、家にいるあいだはとにかくよく動かし、よくしゃべる。二つ下の弟もおしゃべりだから、むしろ家族の会話は多いほうかもしれない。

学校ではむりしてしゃべらないわたしも、家族とならば少しはしゃべる。むりしなくても、もしやべれるから。

これまで重たい病気の人たちをたくさん見てきた両親は、家の外では貝になってしまいうわたしを心配はしても、それほど深刻になりすぎたり、大さわぎをしたりはしない。うちの親でよかつたと思うのは、そういうところ。

一度だけ、

「心療内科で見てもらうか」

と、お父さんに言われたことがあるけど、わたしは「いい」とことわった。

「こまってないから、いい」

「こまってないっていうのもなあ」

お父さんは苦笑してたけど、それはなわの外側で生きてきたわたしの正直な気持ちだった。

病院なんか行ったら、無口な子から病人へ、へんな格上げをされてしまう。わたしの心の問題に、知らない人たちがどかどか入りこんでくる。そんなのはいやだ。

いまのところ、わたしはしゃべらないことで苦労はしていない。

犬だって、鳥だって、言葉なんて使わなくてもりっぱに生きている。

言葉がないと生きられない人間は不便な生きものだと思う。

風香ちゃんの家はなだらかな坂の上にあった。坂のとちゅうから水の音がきこえてきて、のぼりきつたら、川が見えた。その川の手前に古い家と新しい家が交互みたいにならんでいて、風香ちゃんの家は古いほうだった。

レンガ色の屋根がしぶい木造の一軒家。

「だいま！ ターちゃん、瑠雨ちゃんが洋曲ききにきてくれたよーっ」

大声をひびかせる風香ちゃんに続いて家のドアをくぐると、広い土間にはかいわれ大根のプランターがあつて、玄関のかべには「世界の毒きのこ88選」という特大ポスターがはられていた。迫力のある毒きのこのイラストつき。

「瑠雨ちゃん、えんりよしないで入って、入って。ターちゃん、きつと舞いあがってるよ」

風香ちゃんが言って、どしどし階段をかけたのほっていった。

ゆつくりあとを追いながら、わたしはヘビメタのおじいちゃんと対面する心のじゅんぴをととのえた。革ジャンのかな。長髪ちゆうぱつのかな。バンダナばんだなまいてるのかな。声は出なくても、ちゃんと心のなかで「はじめまして」って言う。

でも、いざ対面のとまがくると、わたしはすっかりあつけにとられてしまい、心のなかまで「……」になってしまった。

満面の笑みでむかえてくれたおじいちゃんが、あんまり想像とちがってたから。

第一印象は、「宝船にのった大黒さま」。顔がまるまるしていてつややかで、いかにもおだやかそうに目がたれている。長髪なんかじゃないし、バンダナもまいてない。どうどうとはけていた。

この人が、洋曲を？

わたしのおどろきがさめないうちに、

「ほほう、あんたがうわさの溜雨るいこちゃんかい。こんなジジイの洋曲をきいてくれるなあ、いやはや、かたじけない」

江戸えどつ子つこみたいなしやべりかたでおじいちゃんが言って、さっそくうたいだそうとし、

「待った！」と風香ちゃんに止められた。

「お客さんに、さぶとん」

風香ちゃんが出てくれたさぶとんはゼブラ柄がらだった。わたしたちのむかひにすわったおじいちゃんは、やまぶき色のセーターの上から木彫きぼりりの首かざり（一角獣いっかくじゆう？）をたらしっていた。部屋の角にある仏壇ぶつだんには赤いドレスを着たおばあさんの写真があった。ふしぎな世界にいるみたいだった。

「ほ、ほ。んんっ。では……」

そうして、おじいちゃんの洋曲がはじまった——ううん、ぜんぜん洋曲じゃなかった！

わたしは耳をうたぐった。

洋曲どころか、それは音楽おんがくでもなかった。

きいたことのない音。

コレハナニ？

まるでまぼろしの生きものがとつじよ出現しゆげんしたみたいだった。まぼろしの生きものまぼろしの遠吠とほえ。そのきみような音ははげしく高まつたり、うらがえつたり、かすれたり、うんと低くなつたりと、ちつともじつとしていない。とらえどころがない。

8 わたしは負けじと追いかけた。えたいの知れないこの音はなんなのか。お経？ おまじない？ ちがう——耳のおくになにかがひつついた。節ふし。そうだ。全体をつらぬくメロデーはないけど、この音には、どうやら節がある。

節だけじゃない。じつと耳をすましているうちに、また新しい発見があった。言葉もある。そう、言葉。おじいちゃんはただガーガー吠ほえてるだけじゃなく、言葉を語っているんだ。そう気づいたとたん、まぼろしの生きものまぼろしの遠吠えが、ちゃんと人間のうたにきこえてきた。

最初からうたにきこえなかったのは、おじいちゃんがおそろしくオンチだからってだけじゃなく、たぶん、そこで語られているのがむかしの言葉だからだ。「若菜わがなつむ」とか、「なお消えがたき」とか、「雪の下なる」とか。おじいちゃんのうたに出てくるのは、百人一首にあるような言葉ばかり。ってことは——。

これは、むかしの人がつくった、むかしのうたなんだ。

9 そう気づくなり、ぐん、と耳の穴のおくゆきが広がった気がした。

わたしはむちゅうで音をひろった。遠い時代からやってきた、とびきりレアな言葉たち。いまの日本語よりもやわらかくて、耳がほつくりする感じ。

その言葉たちは、ゆつたりとした節にのって、わたしが見たことのない世界を物語っている。

「山もかすみて」

「白雪の」

「消えしあとこそ」

「いかなる人にて」

「なにごとにて」

「あらおそろしのことぞ」

ああ、おもしろい。すごいのをひろった。

生まれてはじめての耳ざわりに、わたしはすっかりとりこになった。

こんな音があったなんて。

こんなうたがあったなんて。

大発見。人がむかしのうたをうたうたうたうたというのは、むかしの音をよみがえらせるってことなんだ――。

帰り道は雨がふっていた。

わたしは雨の音が好き。たぶん、この世にある音のなかで一番。

それは、たぶん、わたしの名前に「雨」が入っているからだと思う。

風香ちゃんの名前には「風」が入っている。

雨と風。

だからってわけじゃないけど、風香ちゃんとは、むりしなくてもいっしょにいられそうな気がする。

「溜雨ちゃん、ほんととありがとね。作戦どおりってわけにはいかなかったけど……っていうか大失敗だったけど、わたし、ターちゃんのあんなよろこんだ顔、はじめて見た。いいもん見たって気がしたよ。自分のうたをあんなに一生懸命けんめいきいてもらったの、きつとターちゃん、はじめてだったんだよね」

傘かさをかしてくれた上に、とちゅうまで送るとついてきてくれた風香ちゃん。

風香ちゃんがうれしそうなのは、おじいちゃんがよるこんでただけじゃなくて、きつと、わたしがしゃべったからだろう。

――感動、しました。

気がつくとも、口からこぼれていた。

自分でも、ええっ!? とおどろいた。

家族以外のまえで、あんなふうに、ぼろっと言葉が出てくるなんて。

お面とか、外国の人形とか、ふしぎなものだらけだったおじいちゃんの部屋。でも、あそこにはなわがなかった気がする。みんなとわたしをへだてるなわ。おじいちゃんの自由ほんぼうな歌声が、なわをけちらしてくれたのかな。

そんなことを考えながら、ふと横を見て、あれっと思った。

風香ちゃんがおかしい。さつきまで高々とかがけていた傘を、頭すれすれの位置までさげて、しおれた草みたいにうつむいている。

⑩ きゆうにどうしちゃったの？

まじまじながめていると、

「溜雨ちゃん、あのさ」

傘で横顔をかくすようにして、風香ちゃんがつぶやいた。

「はじめて言うけど、わたし、まえにいっしょにいた桃香ももかたちから、あんまり好かれてなかったんだよね」

風香ちゃんらしくないしめった声。短調のひびき。

「わたし、話が長くて、しつこいでしょ。それに服もダサくて、ふでばこもジミだしね。だから、ほんととはだれからも好かれてなかったんだよね。ま、それはしょうがないんだけど、話がくどいのは自分でもわかっているし。でも……でもね、わたしのふでばこ、あれ、ママが買ってくれたやつなんだ。今だってそんなによゆうなのに、ママが買ってくれて、ハデじゃないけど、安いやつじゃなくて……」

風香ちゃんの声がふるえた。

「わたし、ママやターちゃんのこと悪く言われるの、すごくヤなんだよね。がまんできないくらい、ほんとに、ほんとにヤだったんだ。けど、四人とはなれてひとりになるのは、ほんととすごくこわかったから、だから、溜雨ちゃんがいてくれてよかった。ほんとに助かった。ついでって、話がくどいのはまだなおつてなくて、もし溜雨ちゃんもわたしのこと、ほんととはうざいと思ってるんだったら……」

⑪ うざい？ そんなことないよ。

そう言いたいけど、声にならない。あせると、ますますのどがつまったみたいになる。

しょうがなく、手にした傘をぶるぶる横にゆすってみせたら、風香ちゃんが気づいて「ほんと？」と声を明るくしたから、こんどは傘を大きくたてにふった。

「そっか。よかったあ」

たちまち、風香ちゃんの傘がすつと上がった。傘の下の顔は笑ってた。

「あ、ね、そういうえば、ターちゃんってああ見えて冒険家でね、むかし、旅のどちゅうでおなかすいたとき、いちかばちかどきつい色のきを焼いて食べたら、それが毒きのこで、三日間くらい記憶そうしつになっちゃって……」

「ころつと調子をとりもどした風香ちゃんが、はねるようなテンポで、毒きのこをめぐるおじいちゃんの冒険話を語りだす。

⑫ そののびやかな音に、ときどき、雨と風の伴奏がかさなる。

「ちやくちやく。」

「どどど。」

「じじじじじじじ。」

にぎやかな音に包まれて、わたしはなにか大きなものの内側に入れてもらった気がする。

問一 線(1)「わたしがイメージする『内』と『外』のラインは、ドッジボールのコートとはちがう」とありますが、瑠雨にとつてはどのような違いがあるのですか。その違いを左の空らんそれぞれ十五〜二十字のことばを入れる形で説明しなさい。

「ドッジボールのコート」の方は A であるのに対し、

「わたしがイメージする」方は B である。

問二 本文全体を読み、次の1・2に答えなさい。

1 瑠雨にとつて、雨、風、落ち葉、鳥、おじいちゃんの洋曲などの音や声は、瑠雨がどのようなことをする対象なのでしょう。次の空らんに入五〜七字以内のことばを入れて答えなさい。

瑠雨が一生懸命 対象

2 線①〜⑫のうち、1にあるような瑠雨の音や声への対し方にあてはまらないものが四つあります。その番号の数字を答えなさい。

問三 ターちゃんのうたは実は「謡曲」という室町時代から日本に伝わる伝統芸能で、古いことばに独特の節をつけてうたう歌でした。風香はなぜそれを「洋曲」だと思いきんだのですか。風香がターちゃんのうたを聞いてどのように思ったのか想像して説明しなさい。

問四 瑠雨と風香は、物語の中であったできごとを通して変化します。次の表について、後の1〜3に答えなさい。

【瑠雨の変化】

A

あったできごと

・私を受け入れてくれる風香とのやりとり。
・ターちゃんとの出会い。
・「謡曲」を初めて聴いて感動した。

← (2) なにか大きなものの内側に入れてもらった気がする

【風香の変化】

←

あったできごと

・ターちゃんに「洋曲」をやめさせる計画だと言って瑠雨に聴いてもらう。
・瑠雨がターちゃんの歌を一生懸命聞いて感動をことばで言ってくれ、ターちゃんも初めて喜んだ顔を見せた。

← B

1 A に入ることばを本文中のことばを使って答えなさい。

2 B に入ることばを「瑠雨に対して……できた。」という形で答えなさい。

3 線(2)「なにか大きなものの内側に入れてもらった」とはどういうことですか。説明しなさい。

— 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

※設問上の都合により、本文には一部省略や改変した箇所があります。

人が数を数えるようになったのは、いつ頃のことなのだろうか？

「ここに二つのものがあります」

誰かが、そう言ったでしょう。このとき、どこに、いったいどのようなものがあるのかはわからないけれど、そこに差異があること、少なくともその言葉を発した人が、そこにひとつの差異を見出していることがわかる。

生まれたばかりの赤ん坊は、母と宇宙と文字通り一体で、その世界に「差異」はない。

赤ちゃんとっては母もまた自分自身であり、母乳も内から来るものとして認知されるという。一切の差異が生まれる以前の、⁽¹⁾ 端的な存在の、⁽¹⁾ 充滿の中を、赤ちゃんは全身で動きまわり、手や口で探索する。そこに触れる母の乳房の感触や、自分自身の皮膚の手触りを経験しているうちに、あるときふと、母が「私」ではない、ということに気付く。存在の海に差異の亀裂が走り、「私」と「世界」とが立ち上がる。

数学では、まず1があり、それに2が続くけれど、^A 人間の一生のはじまりにおいては、2と1が同時に到来する。

人はやがて世界に向かって、言葉を発するようになる。昼と夜が区別され、嬉しいと悲しいが分離され、^B こととあそことが呼び分けられるようになる。

言葉はまた言葉を生み、差異がまた新たな差異を生む。こうして、⁽²⁾ 世界の分節化は、留まるどころを知らずに進む。

あるとき人は、数を数えはじめるようになった。

1、2、3、4、5、6、7、……

数は、無限の差異に、名前を与える。

B

身体が経験する世界は、連続的で曖昧だ。皮膚が感じる温かさと冷たさ、耳が聞き取る音の高低や強弱、全身で感じる喜びや悲しみ……これをとってもそうである。この瞬間

からは冷たいとか、いま喜びから悲しみに変わったとか、そういうのはつきりとした境界があるわけではなく、弱い方から強い方へ、あるいは小さいものから大きいものへと、世界は徐々に、なめらかに移り変わる。

⁽³⁾ 一見離散的に思える「個数」の認識とて、その例外ではない。1億3000万の人がいると言ったり、111本のマッチ棒があると言ったりするのは、私たちが数を用いることができるからであって、数を媒介しない数量の経験は、もつとずつと漠然としている。

111本のマッチ棒も120本のマッチ棒も、見た目にはおおよそ同じで、どちらも50本のマッチ棒に比べれば多くて、200本よりは少ないという、せいぜいそのくらいの認識ができる程度である。私たちが、⁽¹⁾ 個数の差異を「⁽²⁾ ゲンミツ」に把握できるのは、数の助けを借りているからであって、生来人間にその能力がソナわっているわけではない。

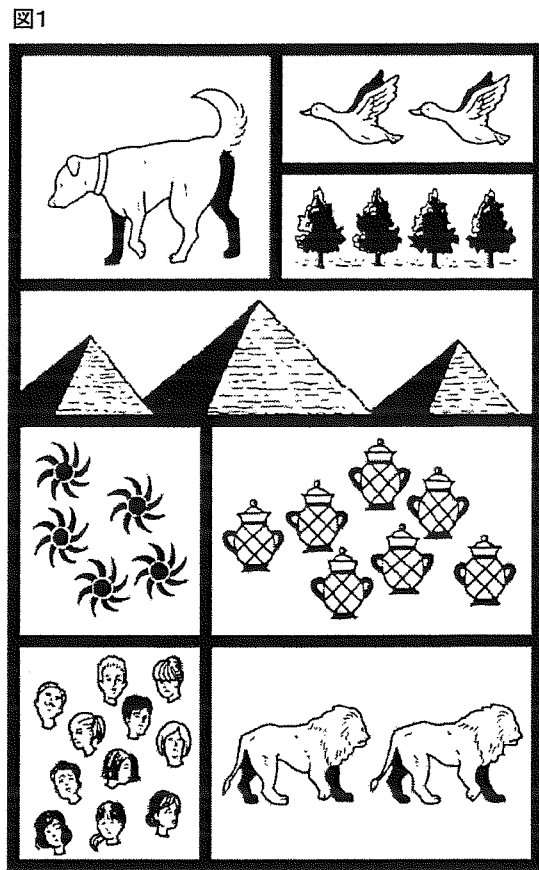
「数は、人間の認知能力を補充し、延長するために生み出された道具である（以下、数の道具としての側面を強調するときには「数」と書くことにする）。「自然数 (natural number)」(※数学用語で正の整数のこと) という言葉があるが、それは決してあらかじめどこかに「自然に」存在しているわけではない。「自然」と呼ばれるのは、もはや道具であることを意識させないほどに、それが高度に⁽⁴⁾ 身体化されているからである。

「数」で武装していない人間は、いくつまでならば個数の差異を正確に把握できるのか。試しに次の絵を見てほしい。^(C) 図1…ジョルジュ・イフラー著『数字の歴史』の図を参考に作成した。この中で、パッと見ただけで個数がわかるものが、どれくらいあるだろうか。一匹の犬、二匹の鳥、三個のピラミッドなどは、何の苦もなくわかるだろう。四本の木も、それほど難しくもないかもしれない。しかし、個数が増えるにしたがって、少しずつ怪しくなってくる。ひと目見るだけでは判断がつかなくなると、実際に数えてみないことには、自信が持てなくなってくる。

人間は少数の物については、その個数を瞬時に把握する能力を持っている。赤いものが赤いということがわかるのと同じように、二個のものは「個だ」とただちにわかる。心理学の世界で、「サブタイゼイション (subitization)」と呼ばれるこの能力の背景にあるメカニズム(※仕組み)はいまだ完全には解明されていないが、近年の認知神経科学の研究によると、三個以下の物の個数を把握するときには、それ以上の個数を把握するときとは

③ 違う、ユウウのメカニズムが働いているらしい。

人間は何らかの方法で、三個以下の物については、数えなくてもその個数を、正確に認識できるのだ。ところが、四個あたりを境にして、この能力は消えていく。見ただけで個数を把握することは難しくなり、数える必要が出てくるのである。



そんな認知的な限界を補うために、人は様々な工夫を重ねてきた。たとえば、身体を使う方法がある。

羊の群れがいる。見ただけでは何匹か分からないので、羊が一匹通るごとに、指を一本ずつ折り曲げていく。そうして、身体の助けを借りて、羊の数を捉える。

残念ながら、指は両手で十本しかない。足の指を使ったとしても二十本だ。そこで、なんとか工夫をして、限られた身体で、少しでも多くの数を捉えようとする。

例えばオーストラリアのヨーク岬とパプアニューギニアの間にあるトレス海峡諸島の原住民は、両手だけでなく、肘や肩、胸や足首、膝、腰など、全身を使って33まで数える方法を持っている。中世ヨーロッパにおいては、両手の指を使って9999まで数える方法があった。しかし、身体の部位には限りがあるから、いずれにしても限界がある。身体を使う代わりに、木や骨にキザミを入れて、数を数えたり、記録したりする方法も

ある。紀元前二万年前後のものときれるイシャング遺跡(コンゴ民主共和国)からは、規則正しく切り傷をつけられた骨片が見つかっている。物の力を借りて数を数えようとした、遠い祖先の痕跡である。

紀元前三三〇〇年頃になると、シュメール人の手によって、世界で最初の文字が発明される。最古の粘土板には、シュメールの絵文字とともに、数を表すための記号がある。初期の文字はやがて、表意文字や表音文字に変わっていくが、数を表す記号は、そのための専用の記号として残った。こうして「数字」がタンジヨウしたのだ。

数字のデザインは文明ごとに多様だが、木や骨に傷をつけたり、粘土の塊を並べたりしていた延長線上で、1を表す記号を二個あるいは三個並べて2や3を表すのが基本である(図2)。諸文明における数字表記。古代インド文字、手書きアラビア文字の表記についてはゾルジュ・イフラー『数字の歴史』を参照。それならば、4や5も、同じ記号を四個並べたり五個並べたりすればよいかというところ、そうはいかない。人間の認知能力の限界のために、同じ記号が四個や五個並んでいることを、正確に把握すること自体が一苦労だからである。そのままでは、道具としての使い勝手が悪い。

図2: 諸文明における数字表記

楔形文字	𐎶	𐎶𐎶	𐎶𐎶𐎶	𐎶𐎶𐎶𐎶	𐎶𐎶𐎶𐎶𐎶
ローマ数字	I	II	III	IV	V
マヤ文字	•	••	•••	••••	—
漢数字	一	二	三	四	五
古代インド文字	१	२	३	४	५
手書きアラビア文字	1	2	3	4	5
現代のアラビア数字	1	2	3	4	5

そこで多くの文明は、4もしくは5を境に、独自の記号をアミ出すことにした。たとえば漢数字の場合には、一、二、三の次が「四」になる。ローマ数字もI、II、IIIの次が「IV」になる。アラビア数字も、もともとインドから伝わった記数法で、2、3までは、漢数字の「二」や「三」に似た形を草書体で書いたもののが、「4」からはやはり新しい形になる。数字は古今東西、人間の認知限界に合わせるように工夫を凝らして設計されてきたのだ。

かくして身体各部位や小石などの物、さらには外部メディアに記録された記号等を用いることで、離散的數量を把握する人間の能力は、少しずつ拡張されていく。
(森田 真生 『数字する身体』より)

問一 線①～⑥のかたかなを漢字に直しなさい。

問二 線(1)～(5)について、本文中での意味内容を説明する文の [] にあてはまることばを、それぞれの選択肢から一つ選び、記号で答えなさい。

(1) 「端的な存在の充満」とは、生まれたばかりの赤ん坊にとってすべてが一体である状態のことで、同じ段落内で同じ内容が比喩を用いて [] と表現されている。

(2) 「世界の分節化」とは、世界に [] を見出すことで区別や分離が起こり、その人の認知する世界に新たな領域が立ち上がることである。

(3) 「離散的」とは、[] と同義であり、離散的數量を把握することを「個数」の認識と言っている。

- ア 連続的で曖昧 イ 徐々になめらかに移り変わる
ウ 漠然としている エ 境界がある

(4) 「身体化」とは、その存在に対して自分の身体の一部であるかのようになることである。 []

(5) 「外部メディア」とは、情報を記録して輸送や保存ができる物のこと。本文では木、骨 [] が例として挙げられている。

問三 線A「人間の一生のはじまりにおいては、2と1とが同時に到来する」とありますが、それはどういうことですか。この場合の「1」と「2」は何を指すのかをそれぞれ明らかにして説明しなさい。

問四 [B]には小見出しとして本文のこの後の部分全体の主題(最終的に説明したいのは何か)を言い表したことが入ります。次の中から最も適切なものを選び、記号で答えなさい。

- ア 人間が瞬時に把握できる數量には限界がある
イ 「自然数」は人工物に過ぎない
ウ 道具としてつくられた「数」と数字、その歴史
エ 数字のデザインと人間の認知能力の関係

問五 線C「図1」の作り方の特徴についての説明として適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 個数の小さいものから大きいものへと順に並べることで、見る人が予測して個数をつかみやすくなるようにしている。
イ 一つ一つの絵の大きさが個数の判断のヒントにならないように、それぞれの表す個数の大きさに比例しないようにしている。
ウ 抽象的で何の絵なのかわかりにくいものと具体的な絵を混ぜてあることで、具体的な絵の方が個数もわかりやすいことを実感できる。

エ 生物と無生物を混ぜてあることで、無生物の方が個数がわかりにくくなる傾向があることに気づかせようとしている。

問六 — 線D「図2」を使って筆者が説明したいのはどういうことですか。八十字以内で説明しなさい。

